

論文題目 貧困からの脱却における「貯蓄グループ」の役割—スリランカ農村部の事例より—

本論文は、貧困層が貧困から脱却しようとする際に、融資ではなく貯蓄という手段を通じて貧困から脱却することが可能であるのか、また可能であるとすればどのような形でそれが可能であるのかを明らかにしようとしたものである。このために本論文では、スリランカの農村部における「貯蓄グループ」に注目し、この貯蓄グループの仕組みやその成果、そして社会の中での位置づけを検討することを通じて、このような仕組みを通じた貧困からの脱却の可能性を論じている。

本論文の構成と各章の内容は以下の通りである。

序論では、まず途上国における貧困削減との関係において、マイクロファイナンスと呼ばれる貧困層や低所得者層に対する小規模金融サービスに注目が集まっていることを指摘するとともに、このマイクロファイナンスに関する従来の議論はマイクロクレジット、すなわち融資を議論の中心としており、貯蓄は必ずしも注目されてこなかったこと、しかし近年、マイクロクレジットの有効性に対する疑問が投げかけられるのと並行して、貯蓄に対する注目が高まっていること、しかし貯蓄による貧困の脱却効果については研究が不十分であることが述べられ、上で述べたような本論文の問題意識及びそれを踏まえた調査の概要と本論文の構成が示される。

第1章「マイクロファイナンスについて」では、従来のマイクロファイナンス、とりわけマイクロクレジットの主要な仕組みとしてのかつてのグラミン銀行の融資の枠組みやマイクロファイナンス機関の現状が説明されるとともに、とりわけマイクロクレジットに対する上記のような批判や問題点が検討される。

第2章「スリランカ農村の『貯蓄グループ』」では、スリランカという国家の概要やスリランカにおけるマイクロファイナンスの現状が説明されるとともに、第1章で説明されたような批判や問題点を踏まえて、貯蓄という仕組みを通じて貧困からの脱却を図ろうとしている取り組みとして「貯蓄グループ」が紹介され、その概要が説明される。

第3章「『貯蓄グループ』の仕組・機能—帳簿・インタビューによる分析—」では、第2章で紹介された貯蓄グループの仕組について、ある代表的なグループの帳簿やインタビューによる分析を中心として、その機能や成果に関する検討が行われる。分析からは、貯蓄グループのメンバーたちは外部からの融資を受けていないこと、グループからの融資は受けているが、その融資の上限額はグループにおける自分の持ち分額であり、いわば自分の貯蓄から融資を受けているにすぎないこと、ゆえに他人の持ち分から融資を受けているわけではなく、この意味でメンバー相互間の依存関係が発生していないこと、一方で、受け

た融資に対する利子はグループ全員で分配されることが見出される。さらに、このような貯蓄グループの活動とそこで蓄積された資金を使った事業活動の結果として、貯蓄グループのメンバーが貧困から脱却していることが明らかになる。

第4章『貯蓄グループ』の全貌—メンバー世帯における無作為抽出調査—では、貯蓄グループにより貧困から脱却したという事実が他のグループでも見られるか、あるいは「貯蓄グループ」がもたらした他の成果は何かを明らかにするために、無作為に抽出された貯蓄グループのメンバーに対して行われたアンケート調査の結果が報告される。この調査からは、貯蓄グループの活動によりメンバーは高利貸しを利用しなくなり、親族からの借入のようなその他のインフォーマルな金融についても依存の程度が小さくなること、また貯蓄グループは貧困からの脱却を通じて自立的な生活を送れるようにする効果のみならず、新たなスキルの習得を促す効果があることが明らかとなる。

第5章「村における『貯蓄グループ』—A村の悉皆調査より—」では、ある村において貯蓄グループがもたらした社会的な影響を明らかにするために、その村における貯蓄グループの位置づけや変化が悉皆調査を通じて検討される。この調査からは、貯蓄グループの活動によりそのメンバーは経済的な地位が向上し、村での地位も改善されていると人々が感じていること、貯蓄グループに参加していない人々も参加したいと考えていること、一方で村の中でカースト等の理由により、最貧困層を含む一部の人々が貯蓄グループの活動に参加しにくくなっており、この意味で排除が生じていることが示される。

第6章「ディスカッション:『貯蓄グループ』と開発」では、以上の発見を整理した上で、他のマイクロファイナンスの手法との比較における貯蓄グループという手法の有用性が検討される。貯蓄グループの特徴としては、グループを組んで貯蓄を行うことで貯蓄に対する圧力が働くだけでなく、自分の持ち分額を限度とするにも関わらず、融資という形で資金を引き出させることにより、返済のための圧力も働き、また利子がファンドに組み込まれることで資金の蓄積のスピードが速くなる点、また一方で自分の持ち分を限度とするために実際には自分の貯蓄を引き出しているだけであるため、利払いが困難になって破綻するという問題がないという点が指摘される。

結論では、これまでの議論を踏まえて、貯蓄による貧困脱出は必ずしも融資による必要はなく、本論文で分析した貯蓄グループのような仕組みを利用することで貧困からの脱却が可能になるのではないかとこの点が指摘され、また残された課題が述べられる。

本論文の構成と内容は以上のようなものであるが、本論文は次のような点において高く評価することができる。

まず、従来マイクロファイナンスの研究において、マイクロクレジット（融資）に注目が集まっていた状況に対して、貯蓄を通じて貧困からの脱却を図ることができることを実証的に示した点が挙げられる。グラミン銀行の取り組み以降、マイクロファイナンスの議論においては融資が注目され続けているが、本論文はこれに対して貯蓄を用いることによって、融資の返済不能による家計の破綻というリスクを負うことなく貧困からの脱却が可能となることを事実的に即して示した点は大きな貢献と言える。

また、綿密な帳簿の分析やインタビュー調査に基づいて貯蓄グループのメカニズムを分

析した結果、本論文の貯蓄グループは単なる貯金ではなく、相互監視に基づいて貯蓄を促す一方で、他人の資金からの融資を受けることがなく、この意味で相互の依存関係が存在しない仕組みであること、またそのような資金の利用において融資という仕組みを利用することで資金の蓄積のスピードを速めていることを発見した点も大きな貢献といえる。貯蓄は確かに有用であるが、監視のない状況で貯蓄をしようとしても自己規律はむずかしく、また資金の蓄積のスピードも遅い。一方で、このような点に対応するために融資を受けようとするれば、事業がうまくいかない場合に家計が破綻するリスクがある。これらの問題に対して貯蓄グループでは、(1)相互監視による貯蓄への圧力、(2)自分の持ち分の資金のみを利用することができ、他人の資金を借りることができない、(3)自分の資金を利用する際にも融資という形をとる（これにより返済圧力がかかるとともに、資金の蓄積が早まる）というような手法により、上で述べたような貯蓄の問題点に悩まされることなく、一方で貯蓄の利点を活かす形で事業の資金を蓄積していくことができる。このような「貯蓄グループ」に内在するメカニズムを明らかにしたことも本論文の大きな貢献であると言える。

さらに、無作為抽出調査を通じて貯蓄グループの役割をより一般的な形で検証し、悉皆調査を通じて貯蓄グループの社会的な影響を明らかにした点も重要である。貯蓄グループの効果を考える際には、単にある特定の貯蓄グループの内部を検討するのみならず、他の貯蓄グループの成果も検討し、さらに貯蓄グループとそれを取り巻く社会との関係も検討しなくてはならない。この点についても本論文は綿密な調査により検討を行っており、この点での学術的な貢献も大きい。

もちろん、本論文にも残された課題はある。例えば、本研究はあくまでスリランカの農村部における貯蓄グループという特定の手法に関するものであり、この手法が他の文脈の中に置かれた場合にどの程度有効性があるのかは必ずしも明らかではない。言い換えれば、この貯蓄グループという手法がどのような状況において機能し、どのような状況においては機能しないかというのは本論文の研究からは必ずしも明らかにできない。この点に関連して、本論文ではマイクロファイナンスの手法としての貯蓄グループに焦点を当てているために、その背景となる事情や文脈が必ずしも十分に掘り下げられていない。このために、どのような文脈の中でこの貯蓄グループという仕組みが機能していたかは必ずしも明らかではない。審査の過程でも、例えば高利貸しというものが歴史的にどのような存在であり、村の中でどのような位置づけをされているのかが必ずしも明らかではない等の指摘があった。

しかし、このような課題があったとしても、本論文がマイクロファイナンスの研究に対して大きな学術的貢献をなしていることは疑いえない。したがって、本審査委員会は博士（国際貢献）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。